

いたゆえの狂気隣接」である。

しかし漱石の…否、一郎の狂気隣接は、そのような社会的なものだけにとどまらなかった。家庭において理性で払拭できない「嫉妬」という自分を拘束する感情に苛まれた。一郎はどこにも精神の安息を見出せない。そしてここから「結婚による女性の変化」に対する「狂気ゆえの愛の真実」の論及になる。これは単に妻になってからの女性の変化というだけでなく、恋愛の三角関係における嫉妬も含まれている。要するに自己絶対であらねばならぬ故に起こる女性に対する不安だ。それと同時に自分の真面目に対する真っ直ぐな反応への願望である。一郎は妻の無頓着な言動や、子供を自分に対抗する道具にする行動の本意に思い至れない。そこでその曲折的行動から起こる猜疑心という嫉妬を、三沢と精神病の娘さんの関係を例に分析しようと試みる。

さて、その二人の関係がどんなものであったかという、放蕩の夫の帰りを待ち続けて裏切られ離縁された娘を、仲人をした三沢の家で預かった。ところがその娘はどうやら精神に多少異常をきたしていたらしい。三沢が外出する度に、どんなに隠れて外出しようとしても必ず追って来て「早く帰って来て頂戴ね」と見送る。その娘は亡くなったが、思い返すに三沢はその娘が自分に惚れていたと解釈している、という話だ。一郎は弟の二郎に問う。「実際問題、その娘は元の夫に言えなかったことを三沢に言うのか、それとも三沢自身を思って言うのか」そして兄はこう解釈する。『人間は普通の場合には世間の手前とか義理とかで、いくら云いたくても云えない事が沢山あるだろう』しかし精神病になれば世間並みの責任はその女の頭の中から消えて無くなるから『その女の三沢に云った言葉は、普通我々が口にする好い加減な挨拶よりも

遙に誠の籠った純粹のものじゃなかろうか』即ち三沢への愛が本物であったと見るのである。そして一郎の希求は『噫々女も^{あわあ}氣狂^{きちがい}にして見なくっちゃ、本体は到底解らないのかな』(第12章)というため息となり、次の自己主張となる。『己は講義を作るためばかりに生まれた人間じゃない。然し講義を作ったり書物を読んだりする必要があるので肝心の人間らしい心持を人間らしく満足させる事が出来なくなってしまったのだ。でなければ先方で満足させて呉れる事が出来なくなったのだ』(第4章) これは一郎の苦しみであると同時に漱石自身の内面の痛みである。それをHさんの口を借りて自己批判へ転換する。『君は山を呼び寄せる男だ。呼び寄せて来ないと怒る男だ。地団太を踏んで口惜しがる男だ。そうして山を悪く批判する事だけを考える男だ。何故山の方へ歩いて行かない』(第40章) もちろん理論では十分承知していることだ。だが鋭敏高度な頭脳を持ってしまった男は、一般的レヴェルまで自分を下げられず、かといって相手を引き寄せることは到底できない。ただ孤独のうちに沈むだけである。人間の一番尊い「純粹」を知っていながら、それを身につける条件を捨てなければならなかった知識人の悩み。『虞美人草』の小野さんが、宗近君の天真爛漫を羨むごとくに。そしてその愛情交流への渴望は血縁者・友人ではなく、男と女の愛一特に妻との関係に現れる。何故なら妻は自分の日常に一番身近な存在であるからだ。そこで最も日常の共有性を見出したい相手の結婚前に示された純粹性が、結婚後に失せるという失望に直面する。それは心の交流が出来たと信じたものが薄れてゆくという寂しさからの苦悩である。理性で夫婦関係を保つ一郎は、ついに日常の夫に即する妻に手を上げた。しかし直は抵抗しない。押せば退くが、自分が退いたら退いたままだ。それが一郎の、漱石の寂しさである。高度な頭脳が求める「人間としての手応え」を、日常人は呈する術を知らない。そしてもし逆にそれを持ち得るとすれば実質生活は殊更虚偽に満ちたものになるだろう。それは矛盾である。一郎は自分の中の矛盾—自分が非難する人間と同様の自らのエゴイズムに苦しむのである。日常人は悟らぬまでも一

刻の天然に憩うことができる。平凡にして平凡に気付かぬままに暮らしていけるのが世間一般の人である。けれど常に思考を要求される頭脳の中には天然の一音さえ入る余地がない。従って気付く能力の恩恵を受けながら気付かぬ人より不幸なのである。

そこでその不幸から発する不満は、一郎の皮肉な言葉となって飛び出す。『君は結婚前の女と、結婚後の女と同じ女だと思っているのか』(第51章) 『虞美人草』では甲野さんが純粋な糸子にこう語る。『あなたはそれで結構だ。動くと変わります。動いてはいけない』『ええ、恋をすると変わります』『嫁に行くと変わります』漱石のこの女性観はかなり根強い。そして前作『草枕』『虞美人草』では理性的表現で語られているが、後の『行人』では感情的表現で言及されている。それは一度心の中で処理された物事が、神経衰弱によって再燃した結果であろう。逆にこれを描くために神経衰弱が強くなったともいえる。しかし少なくとも環境内外両面の苦しみの著作はかなり神経や胃に応えたいと思う。知識人として理性では自分本位な愛を批判しながらも、人間の情念として自分の思う形で愛が発現されることを望むという、エゴイズムの二面性に翻られる実際の痛みも大きかったろうと思う。自らの頭脳を発展させた結果、社会にも家庭にも、否、如何なる地上にも安住の地を見出せなくなった精神は、止むに止まれず「孤独」という世界に向かわねばならなかった。因みにこの「孤独」とは実質的に一人ぼっちという意味ではなく、精神的に独りぼっちということである。然しその緊張は凶らずも以下の眺望を経て病後の最終章によって解放される。

学者としての漱石はまさに一郎である。けれど人間としての漱石は二郎である。『吾輩は猫である』で哲学者の言に乗じた漱石の女に対する俯瞰は、一種のエゴイズムを削りながら一郎から二郎へと視点を転じた。『自分は経験のある或年長者から女の涙に金剛石は殆どない、大抵は皆ギヤマン細工だと嘗て教わった事がある。その時自分は成程そんなものかと思って感心して聞いていた。けれどもそれは単に言葉の上の智識に過ぎなかった。若輩な自分は嫂の涙を眼の前に見て、何となく可憐に堪えないような気がした』そしてまた兄をも弁護する。『そりゃ兄さんの気むずかしい事は誰にでも解ってます。あなたの辛抱も並大抵じゃないでしょう。けれども兄さんはあれで潔白すぎる程潔白で正直すぎる程正直な高尚な男です。敬愛すべき人物です……』漱石はこの自己問答ともいえる表現の中で、夫婦互いの食い違いを折り合わせようとした。延いては人間相互間に潔白—真面目という血の通った連鎖を見出そうとした。

最後に漱石はHさんの手紙を通して哲学を説く。『あなた方は兄さんが傍のものを不愉快にすると云って、気の毒な兄さんに多少非難の意味を持たせている様ですが、自分が幸福でないものに、他を幸福にする力がある筈がありません。雲で包まれている太陽に、何故暖かい光りを与えないかと逼るのは、逼る方が無理でしょう。(中略) 貴方も兄さんから暖かな光を望む前に、まず兄さんの頭を取り巻いている雲を散らしてあげたら可いでしょう』ここで視点ははいよいよ夫婦から家族—社会へと広がり、人間全般の「エゴイズムに対する人間の尊厳への提言」に姿を変える。漱石は「尊い人間」として先に印象付けたHさんにそれを語らせることによって、喜劇を演じる作中人物と自分に救いを示すとともに、読者との間に心理的にワンクッション置いた。

そして最後の一文『兄さんがこの眠から永久覚めなかつたらさぞ幸福だろうという気がします。同時にもしこの眠から永久覚めなかつたらさぞ悲しいだろうという気も何処かです』永久の眠りが救いだとしたら、それは大いなる悲劇である。(2014.1.3)